



MAJOR ORCHESTRA
LIBRARIANS' ASSOCIATION

楽譜用意のガイドライン

Music Preparation Guidelines for Orchestral Music

The Major Orchestra Librarians' Association 編集委員会編

The Major Orchestra Librarians' Association

Music Preparation Guidelines For Orchestral Music MOLA 楽譜の用意のガイドライン

The Major Orchestra Librarians' Association(MOLA)の主要目的とすることはオーケストラライブラリアン同志がお互いに磨きをかけるためのコミュニケーション、練習準備そしてオーケストラ事務局への情報提供、出版社に対して意見提供、それぞれのオーケストラのライブラリアン育成機関である。

MOLA はシンフォニーオーケストラ、オペラやバレエカンパニー、プロフェッショナルなバンドやアンサンブル、教育機関での国際的なライブラリアン組織である。我々のメンバーは北米大陸をはじめヨーロッパ、中東、アフリカ、アジアそしてオーストラリアからなる。

MOLA 定例会議にて定期的に出版社の代表を招き出版そして演奏楽譜に関して取り組んでいる。MOLA 出版部門の設立により出版社との共同協力された情報を提供する。

MOLA は MLA (Music Library Association) / MPA(Music Publishers' Association)/ MOLA 合同委員会を務めている。さらにその上、MOLA は音楽提供組織との関係を培っている。そこには International Association of Music Librarians , the American Symphony Orchestra League , the American Federation of Musicians, the International Conference of Symphony and Opera Musicians, そして the Regional Orchestra Players' Association である。

質問等があれば、近くにあるオーケストラ、オペラ、バレエオーケストラもしくは MOLA のHPにアクセスください。

www.mola-ing.org

序章

これらのガイドラインはMOLA会員の討論をもとに作られた結論でライブラリアンのスコアからパート譜の用意に至るまでである。我々はそれぞれの音楽の出版社がその音楽を演奏するにあたり最低限のガイドラインがあると思っている。我々は、これらのガイドラインをもとに出版社と作業を進めることが望ましい。我々はそれぞれのフォームに合わせて楽譜を用意すれば作業効率も上がるのである。

コンピューターを使う

有利なことと不利なこと

PCを使い作曲、アレンジをするということはとても有益でありそこからプリントアウトされる楽譜やスコアは大変読みやすいものである。出版社や作曲家、編曲家は機能的に伝統的な音楽を作ることができる。

テクノロジーは作曲家やコピーストが入力したスコアからは電子楽器ではあるが音楽が出るようになってきている。一度スコアを入力してしまえば短時間で個々のパートが独立し、移調、データ化されてプリントされPCにセーブされる。この技術は高性能で編集の機能、複写そして保管できる楽譜である。

有益性ばかりではなく必ず危険も含んでいる。例えば、もし楽譜を用意し楽員に配り終えたが新しい編集の作業を言い渡されたとしよう。それは作曲家、コピーストそしてライブラリアンが楽曲構成の中で正確かつ適切なもののためには配り終えた楽譜をセーブしておかなければならない。基本的にデータとしての保管、そしてもちろんのことながら音楽別に区別しておくことである。ライブラリアンは出版社（印刷）の役目と仮定し印刷すること、複製、そしてプリントアウトする楽譜という作業を念頭に入れておかなければならない。全てのライブラリーに該当するものではなくその仕事に対して適応させ、ライブラリアン間で楽譜のレイアウトやフォーマットを話し合うことができるようにし、決して出版社の肩代わりをするものではない。

とはいえ、手書きのスコア、PCで作られたスコアであれ、これらの楽譜が読めるということが大きな目的であり最終的には楽員が使えるということなのである。

スコア

表紙

それぞれの出版社は各々の楽曲側面をスコアの表紙に重要な情報がわかることが必要条件となっている。スコアの表紙と背には作品の題と作曲家の名前が目立つように印刷されている。編曲者の名前を表紙には必要ではなかったらタイトルと作曲家だけが出されている。それに加え、名前と出版社の住所や簡単な情報は載せてある。

前記 (タイトルページ、はしがき、その他)

作業を始めるにあたっての楽曲編成については最初のページに記されている。全ての楽器、持ち替え、移調楽器 (クラリネット、ホルン、トランペット等)、そして全ての打楽器の種類。

スコアの中では分りづらい打楽器奏者の人数が表記されているということは大変役に立つ。また特殊なものとしてシンセサイザーの位置、電子オルガンの用意等が楽器編成等のページに記されている。また楽曲の演奏説明や詳細を具体的に理解できる。事前に用意する楽器、またはめったに使用しないような楽器についても楽器群のページに記されている。舞台配置の詳細もそのページもしくは後ろのページに記されているので注意しなければならない。細部にわたっての総合的な舞台配置を説明するステージ図があればとても役に立つ。もし、例外的な記譜法があればそれらの説明が楽器編成等のページに書かれている。通常のコन्サートプログラムでそれにふさわしい構成と楽曲の呼び方の種類、一つ一つの楽章の適切なタイトルをも印刷されている。その楽曲の概算の楽章時間とトータル時間も記されている。

総譜

スコアの冒頭は該当する楽器全てが左に書かれている。続きのページには楽器の名前が省略されていることもある。テンポやダイナミクスの説明は英語、イタリア語、ドイツ語またはフランス語で記されるのが標準である。全てのテンポの指示は全ての楽器の一番上と Vn1 の上に書かれている。小節数は楽章ずつで新しい楽章が始まると最初からナンバリングされている。小節数は全ての楽器において同じでなければならない。すなわち、上や下、重要な楽器群の上、Vn1 の上である。もし、練習番号が使われるのなら、それらは音楽の中での標識を意味するものであり小節数とも合致していなければならない。

スコアリーディング

コンピューターに入力されたものを読むことは不可能に近いので印刷されて製本されたものを使うのが一番である。(鉛筆書きも可能、しかし出版社が用意した完全に近いもののコピーのスコア) 上質な皮であれ、不透明な紙であれ最初から最後まで美しく複写されたものを使うこと。右手側では奇数になるようにそして左手側では偶数になり右上、左下にページの数字が記されているようにする。

スコアは作曲家とプロの校訂者によって出版・複製される前に校訂されなければならない。

パート譜

通常

練習に耐えうるパート譜というのは楽譜の1ページ目で明確に判断される。それぞれのパート譜は作曲家、題、作品番号、移調楽器によっては調が書かれている。打楽器のパート譜は全ての楽器が印刷されているものもある。

手書きのものよりもコンピューターから印刷されたものが望ましい。もし、手書きされたパート譜であれば写譜ペンを使いイタリック体文字で黒インクで印刷されたものが好ましい。

右手側は奇数、左手側には偶数になり右上、左下にページの数字があらわれるようにする。

木管においては2声で書かれているものは避けること。(たとえばフルート1、フルート2は別々にすること)弦楽器に関してはパートに一つのパート譜を作ること。複雑なDIV.がある弦楽器はそれぞれ分けて書くようにする。弦楽器のための楽曲の楽譜に関しては2~3パートが重複しているものがあるが必要なものは特殊な扱いとし音が途切れることのないように演奏できるようにする。

紙

紙は丈夫で裏面が透けてみえるようなものは避け空調の風にステージの上で耐えうるものを使う。最低条件は通常60もしくは70lb.(100グラム)の印刷紙である。

ページレイアウトはページをめくるのに負担がないようにする。折込みページのようなものはないように、もし絶対にそれが必要であれば慎重に扱うこと。

全ての楽器で加線や2声になったものを考えると8~10段の五線で1ページとするのが好ましい。12~14段の五線は複雑ではなく鮮明な記譜の構成であればその状態でも良いであろう。

楽譜の読みやすさ

もっとも読みやすい五線は8.5mm(下から上まで測ったもの)である。管楽器は8.0mmでも読むことができるが弦楽器では無理であろう。管楽器奏者は7.5mmでの楽譜を読むことが可能であるが弦楽器奏者では不可能である。オーケストラのパート譜としては7.0mmより小さいものは許されない。8.5mm以上のものは奏者にとっては気の散るものであるに違いないので使用はやめたほうが良いであろう。

小節数はそれぞれの段の頭につけること。長い休みがある時にはその範囲に“27-117”(例)などと書いてあげるといいであろう。

手書きでパートを写す時には音符で線を使うところや五線、特に二段になるハープやキーボード等は必ず直定規を使うようにすること。

長い休みの間の他の楽器のガイドであるがその楽器の調で写してあげる。ガイドは演奏者が聞こえているパートが原則である。

テンポと拍子の変更に関しては全てのパートにわかるように書き込み、長い休みがあってもそこに書き入れること。“まだTACET”などと容易に使わないこと。

簡単な注意事項

- ♪ 音符記号、ト音記号、ヘ音記号、ハ音記号と調を頭にしっかりと書くこと。
- ♪ 移調楽器に関しては必ずその調を書いてあげること。
- ♪ ハープのペダリングは奏者に委ねられるべきである。
- ♪ ティンパニの楽譜は絶対に打楽器パートと混ぜない。
- ♪ 打楽器パートは全体のパートもしくは個々に独立したパートになっている。その音楽が持つ要求によって利点を生かしてあげることが大事である。経験のあるオーケストラ打楽器奏者に相談することが好ましいであろう。オーケストラ内に打楽器首席奏者がいるのであれば相談するものいだろう。
- ♪ 打楽器の楽器は高音、低音と記譜されているが他の楽器との関係で音の高さを決めること。打楽器の担当は一つの演奏会を通して常に同じ楽器を担当する。楽曲の調を楽譜の頭を書いてあげると奏者にとっては大変助かるものであろう。
- ♪ パート譜で再版された移調楽器はオリジナルに記された調をも書き込んであげること。
(例 Horn in E \flat → Horn in F)
- ♪ 省略されている 8va と 8va basso はよく注意すること。

校訂

決して作曲家や楽譜を用意したコピーストのみで校訂されたものを使うのではなくプロの校訂者によって校訂されて複写された楽譜を優先して使用する。オーケストラライブラリアンのみで校訂作業を済ませて用意をするということをしてはならない。

紙の大きさと製本

北米では 8×11 インチを印刷画面とし最小でも 9.5×12.5 インチの紙を常備している。必要条件として余白部分を 0.75 インチとしている。出版社の通常のサイズは 10×13 インチである。パート譜は 11×14 インチでは大きすぎて不便である。

ISO では 2 種類の用紙を使っていて 170mm×257mm で A4 より小さくならないようにしている。また 40mm の余白を条件としている。ISO での通常の紙の大きさは A4 と B4 である。A4 は最小限として考えたもので B4 は A4 よりも大きいものでライブラリアンにはこのサイズをお薦めする。同じく同様に B4 より大きければ不便である。

紙のサイズは使い方によっては気にしなくてもよく 2 ページを一枚としてコピーすることも可能である。

パートとスコアは一緒に棚にフラットになるように寝かせておくこと。プラスチックの差し込み式、コイルバインディングはスコアにはいいが決してパートには使わないこと。諸事情で書き加えられたページに関してはわかるように記入してクリップでとめるなどしてそのセットに入れておくこと。他の技術的なものとしてはパート譜の左のページには柔らかいクロステープの細いものを貼るといい。(テープは Vital Presentation Concepts Inc.[www.vpcinc.com] 3M 社サージカルテープ[www.3m.com]) 全てのページはセンターの背で綴じられていること。ゆるく取れそうになったページは中央の余白部分もしくはセンターに貼ること。折りたたんだ楽譜 (1 枚のみ、または製本されて 2 枚びらき) などたやすく認めてはならない。

***注釈**

コピーリスト

北米では存在する楽譜のミス等の修理作業をする職業。ユニオンに登録する際にライブラリアンもしくはコピーリストとして登録している。オーケストラに勤めているライブラリアンはコピーリストもいる。

レイアウト

楽譜のレイアウト（めくり）に関しては日本では差し込み方式で作業をすすめていくが北米では完全にレイアウトを変えて最初から作業をすることもしばしばである。

（河野純子）

参考文献

スティーブン・パウエル

Music Engraving Today

The Art and Practice of Digital Typesetting.

(New York :Brightmark Music,2002)

テッド・ロッシ

The Art of Music Engraving and Processing

A Complete Manual,Reference and Text Book on Preparing Music for Reproduction and Print

(2nd ed.,Miami,Fla.:Charles Hansen,1970)

サミュエル・Z・ソロモン

How to Write for Percussion

A Composition

(New York SZSolomon 2002)

クルト・ストーン

Notation in the Twentieth Century

A Practical Guidebook

(New York: W.W.Norton,1980)

（訳：関西フィルハーモニー管弦楽団 河野純子）

楽譜用意のガイドライン

Music Preparation Guidelines for Orchestral Music

Major Orchestra Librarians' Association 編集委員会編

Major Orchestra Librarians' Association

1993年版

フィラデルフィア管弦楽団

Clinton F. Nieweg

サンフランシスコバレエ団

David Bartolotta

ヒューストン交響楽団

Peter Conover

トロント交響楽団

Gary Corrin

ナショナル交響楽団

Marcia Farabee

メトロポリタンオペラ

John Grande

フィラデルフィア管弦楽団

Robert M. Grossman

ミネソタ管弦楽団

Paul Gunther

St. Paul Chamber Orchestra

James Kortz

バルティモア交響楽団

Mary C. Plaine

メトロポリタンオペラ

Rosemary Summers

ニューヨークフィルハーモニック

Laurence Tarlow

サンフランシスコ交響楽団

John Van Winkle

2001年改訂版

サンフランシスコ交響楽団

John Campbell

New England Conservatory

Russ Girsberger

(ニューイングランド音楽院)

National Arts Center Orchestra

Margo Hodgson

Florida Philharmonic

Carol Lasley

The U.S. Army Field Band

Cathy Miller

ユタ交響楽団

Patrick Zwick

2006年改訂版

ロサンジェルスフィルハーモニック

Stephen Biagini

New England Conservatory

Russ Girsberger

ロサンジェルスフィルハーモニック

Kazue McGregor

フィラデルフィア管弦楽団

Clinton F. Nieweg

San Antonio Symphony

Gregory Vaught

フロリダウエストコーストシンフォニー

Justin Vibbaard

その他の出版物

MOLAの出版委員会はほかに2冊の冊子を出版しています。冊子の題名は、「MOLAとは何でしょう」と「オーケストラライブラリアン業務の紹介」です。

MOLAに関する詳しい情報は、MOLAのホームページwww.mola-inc.orgをご覧ください。

